

ブレインストーミングを利用したアイスブレイクと自己紹介スピーチの指導 —大学入学後第1回目の英語授業のために—

北 村 ひろよ

(京都精華大学)

1. はじめに

中学または高校の英語授業につまずいた学生にとっては、やっと入学した大学で再び英語の授業が必修とされている事実にいささかのショックを受ける。そのような学生が多く集まるクラスの場合、毎回の授業は教科書を中心としながらも、ゲームやアクティビティーを多彩に取り入れた魅力ある授業計画が求められる。特に大学入学後の第1回目の英語の授業は、英語授業、あるいは英語そのものにたいするネガティブな印象を払拭させて新たに興味を抱かせることが肝要だと考え、初日の授業ではブレインストーミングを利用したアイスブレイクを試みているのでその方法と効果を紹介する。^(注1)

筆者が非常勤で出講している京都精華大学は次の5学部から成り立っている。芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部、人文学部である。

2017年度から「英語」は全学部共通編成クラスとなり、入学式後の TOEIC Bridge の点数によって A (上級クラス) から D (初級クラス) までの4レベル別に振り分けられ、1クラス20人前後の少人数編成である。

同大学の1年生のカリキュラムでは、必修科目の「英語」が大学入学後の最初の授業の日に設定されている。2017年度において筆者が担当したクラスは初級の D1 および D2 クラスの2クラスで、入学時の TOEIC Bridge の点数は D1 クラスの最高点が 92 点、最低点が 64 点、D2 クラスの最高点が 92 点、最低点が 62 点であり、平均点は両クラスとも 84 点であった。^(注2)

クラスの特徴としては学生のおお全員が英語嫌いとお苦手意識を持っており、中には中学で不登校となり通信制の高校時代に英語の授業を受けてこなかった学生も数人混じっていた。そのような学生たちにも等しく英語学習へのモチベーションを上げるためには、大学入学後の最初の英語授業の印象が大変重要であると考えている。また高校までの50分授業から大学では90分授業となり集中力をより長く続ける必要がある。初日の授業が長く感じられ、難しく面白くなければ今後1年間の授業へのモチベーションが期待できない。とりあえず初日は、楽しかった、英語が面白そうだ、90分は意外と短い、などといった印象を残すことを第1の目的としたい。

そこで入学後の第1回目の授業では指定教科書を全く使わず、ブレインストーミングの手法を用いてアイスブレイクと英語での自己紹介スピーチの指導を90分間で行い、学生の英語に対するネガティブな印象を払拭し、意外と自分たちも英語ができるのではないかという自信へ導くような指導を工夫している。

なお、本稿は、2017年10月14日に開催されたJASEC第26回年次大会で発表した「ブレインストーミングを利用したアイスブレイクと自己紹介スピーチの指導ー大学入学後第1回目の授業のためにー」に、ブレインストーミングの概念を追加し、修正したものである。

2. ブレインストーミングの概念

本題である大学入学後の初日の英語授業の流れを述べる前に、ブレインストーミングについて簡単に述べておく。

ブレインストーミングの提唱者であるアレックス・F・オズボーン(1948)によると1939年に最初のグループ思案を組織し、初期の参加者はこれを「ブレインストーム会議」と名付けた。すなわち、頭脳(ブレイン)に嵐(ストーム)を引き起こして各参加者が一つの創造的な問題に攻撃的に取りかかることを意味する。と述べている。(豊田晃訳「創造力を生かせ」1969年 p.289)^(注3)

またブレインストーミングには簡単な規則が必要だが、リーダーは出席者全員がそれを理解していることを確認しなければならない(豊田訳1969, p.294)。この規則をオズボーン(1948)は基本的なブレインストーミングにおける4原則と提唱している。しかし今回の授業において筆者は Toastmasters International が発行している Advanced Communication Series の Facilitating Discussion (2011) を参考とした。それによると基本的なブレインストーミングの原則は以下の5つである。^(注4)

Basic Brainstorming Principles;

1. Quantity, not quality counts.
2. No idea is rejected.
3. All ideas are listed and displayed where everyone can see them.
4. Participants may build on one another's ideas.
5. Discussion and analysis are prohibited.

上記の5原則は、オズボーンが提唱した4原則とほぼ同じであるが、上記のうち原則3はオズボーンが提唱している4原則に含まれていない。しかしオズボーンは厳密に正式に行わねばならない唯一の事柄として提出されたすべてのアイディアの記録の写しを参加者全員に渡ること、と述べており(豊田訳1969, p.295)、上記の原則3と考え方は等しい。

さて、ブレインストーミングの原則1 Quantity, not quality counts. と原則2 No idea is rejected. を守った結果、多くのアイディアや意見が散乱することになる。授業でブレインストーミングを行う場合、散乱したアイディアや意見をそれをどのように收拾させ結論づけるのがリーダー(今回の授業の場合、筆者である講師)の最も大切な役目である。今回の授業ではブレインストーミングを2度行ったわけだがそれぞれのブレインストーミングはその内容と目的が違うため、結論としての着地点が異なる。それぞれの着地点については後の3. 第1回目の授業計画の項で述べることとする。

3. 第1回目の授業計画

90分の授業は以下の表1に示す流れで行った。

第1回目授業計画 2017年4月10日(月)

D1クラス1時限目、D2クラス2時限目

項目	議題・内容	単位	時間
出席確認		クラス	3分
1. Brainstorming (1) 発表	「英語」を学ぶ理由	個人 グループ クラス	25分
2. Brainstorming (2) 発表	自己紹介の項目	グループ クラス	15分
3. Discussion	自己紹介スピーチ(1分)の項目を選び、	グループ	10分
4. Criteria	英文を作り難形化を行う	クラス	
5. 原稿作成と練習	英文を講師が見回りチェックする	個人	15分
6. スピーチ	ペア・グループでスピーチ発表 グループから代表者のみクラス発表	ペア・グループ クラス	15分
シラバス配布・感想		クラス	5分

表1

3.1 ブレインストーミング(1)

最初のブレインストーミング(1)のテーマは「なぜ英語を学ぶのか」言い換えると「英語を学ぶとどのような良いことがあるのか」とした。

まず始める前にはオズボーンが言うように、すべての学生にブレインストーミングのやり方と原則を説明した。前述の原則3 **All ideas are listed and displayed where everyone can see them.** 以外をすべて説明し納得させた。原則3に関しては後ほど講師である筆者が白板にすべてのアイディアを記録し視覚化するとした。

初めてブレインストーミングをする学生に、原則1 **Quantity, not quality counts.** を説明する前に、量と質とどちらが大切かを問うと、多くの学生が質だと答えたが、ブレインストーミングでは質より量が大事と説明すると決まって意外な顔をするのが面白い現象であった。

オズボーンは理想のブレインストーミングの人数は5~10人としているが(豊田訳 1969, p.291) この段階ではブレインストーミングは、いきなり集団、つまりグループやクラス全体では行わずに、まずは個人で考えさせて思いつくすべてのアイディアを紙に記録させた。これは、初対面同士の集団では意見を積極的にだしづらいという筆者の過去の経験から、まずは独りでブレインストーミングを行うことにしているのだが、自分だけで考え

ることによって誰にも考えを邪魔されたり、躊躇なくアイデアを書くことができるという大きな効果がある。

次に、独りブレインストーミングがほぼ終わる頃を見計らって4～5人のグループを作り、グループ内で各々のアイデアを発表しあった。その際、原則の

2. No idea is rejected.

4. Participants may build on one another's ideas.

5. Discussion and analysis are prohibited.

について再度説明し、特に、他の人のアイデアから新たな発想が生まれたら積極的に発言しあう、ことを強調した。グループのブレインストーミングが生産的な理由は、創造的な思索のみに集中し、イメージーションを萎えさせる批判や邪魔を排するからである。また感化力も大きな役割を果たす。(豊田晃訳 1969年 p.297)

このあたりから、英語が苦手な学生が示しがちな初日特有の硬い空気がなごみ、まさに自然にアイスブレイクしてきていることを実感できた。アイデアはくつろいだ気分で努力するときに一層多く出る。(豊田訳 p.296) 一人の学生の「ヨーロッパの動物園に行ったときに動物の説明の看板がなんて書いているかわからなかった。動物が好きだから海外の動物園の看板が読めるようになりたい。」という意見をきっかけに個々が一般的な理由ではなく、個人の興味、趣味にあった英語を学ぶ理由を考え始めた。この現象は、一人の頭脳(ブレイン)のひらめきが他の人々の持つすばらしいアイデアに火をつけて嵐(ストーム)のように連鎖反応が起こり、創造力をかきたて、連想力にも働きかける(豊田訳 p.297) ことができたことを証明している。

最後に、グループで出たアイデアを2、3個ずつ順番に発表させた。ここで原則3の All ideas are listed and displayed where everyone can see them. は筆者が受け持ち、白板に書いていくこととした。

各グループからの発言が全部出尽くしたことにより、ブレインストーミング(1)を終了させる必要があるのだが、学生たちに改めて自分たちが出した意見を眺めさせ、なるほど心に響くアイデアがあるかどうか、数人に答えさせた。これが筆者の考えるブレインストーミング(1)の着地点である。

結果として、英語を「勉強する」のは単位を取るため、大学卒業の必修科目だから、としか考えていなかった多くの学生たちが、「なぜ英語を学ぶのか」自分にとってふさわしい目的がブレインストーミングによって一つでも見つけることができたならこのブレインストーミング(1)の着地点として大成功であると筆者は考える。自分たちにも英語を学ぶ意義や目的があったと気づくだけでも今後の英語学習へのモチベーションはかなり上がるであろう。

3.2 ブレインストーミング(2)

2回目のブレインストーミングのテーマは自己紹介スピーチの内容である。すでにクラスの雰囲気はアイスブレイクしていたため、また時間配分からも独りブレインストーミングは行わず、同じグループで「自己紹介スピーチの内容はどのような項目、内容がふさわ

しいか」についてブレインストーミングさせた。そもそもブレインストーム会議では精通したリーダーが必要であるのだが、ここでの観察としては、自然発生的にグループ内でリーダーシップをとる学生が見受けられたことである。一方、静かで発言が積極的になされていないグループには、司会役（リーダー）と書記役を適宜指名するか、決めさせるとその後は比較的スムーズなブレインストーミングの作業が進むようであった。

次にグループ単位でアイデアを発表させる。原則3の *All ideas are listed and displayed where everyone can see them.* は筆者が受け持ち、白板に書いていく方法はブレインストーミング(1)のやり方と同じだが、(1)のときと違う点は、学生は日本語で発表したとしても、白板にはすべて英語で書いていったことである。

ここでは *name, nickname, hometown, major, hobby, interest, club, family...* など、自己紹介として一般的で常識的なアイデアばかりが発表された。発表の際は間違ってもいからできるだけ英語の単語を使うように奨励するのだが、学生の単語力が低いこともあり *hobby* や *major* などの単語も学生の口からは出てこないことが往々にしてある。しかしいちいち気にせず瞬時に講師側で英語化し、視覚化していくことがポイントだと考えている。なぜなら授業の流れを停滞させず学生の集中力を保つためにはスピード感が必要だからである。

なお、それぞれの項目に対して英語での言い方の例も同時に紹介し、必要に応じて板書していった。例えば、*hometown* の項目では *"I'm from Osaka."* などである。この作業の目的は、ナチュラルな英語例文を提供することなのだが、講師である筆者の事実上の自己紹介も兼ねている。また例文を学生に答えさせると時間がかかりすぎ、今回のこの授業計画を全うするには90分間ではとても時間が足りなくなる。90分という授業時間を管理するためにも講師が英文を次々に提供していった。

2回目のブレインストーミングの着地点としては、学生たち自らで、1分間で発表できる自己紹介項目の数とふさわしい項目内容を話し合いによって選ばせることにした。芸術系の学部の学生が複数人含まれていたグループは *"My Favorite Color"* を選んでいたのが、京都精華大学ならではの面白い発想だったと思う。

3.3 ディスカッション

ブレインストーミング(2)の項目のうち、どの項目を自己紹介スピーチにするかを各グループで検討させた。自己紹介スピーチの持ち時間は1分前後を目安とした。スピーチの1分間は短いと思われるかもしれないが、これはいわゆる *elevator pitch* の手法であり、1分間で最大限に言いたいことをまとめ、聴き手の興味を爆発的に引きつける訓練となる。

次にスピーチ雛形を自分たちで作らせた。そのためにまずは

(1) *Opening, Body, Conclusion*

(2) *Point, Reason, Example / Explanation, Point*

の2種類の基本的な構成方法をよい例として簡単に説明した。

筆者が参考として見る限りプレゼンテーションやスピーチに関する多くの大学教科書では、スピーチの雛形がすでに提供されていてそこに適当な語や文章を当てはめることで

オーガナイズされた良い構成のスピーチが作れるような指導方法が多い。しかし、今回のこの授業でのポイントは、従来のようなお仕着せの雛形ではなく、学生自身でスピーチの雛形を考えて作ることにある。そのことで英語スピーチを自分たちで（協力しあって）作れたという満足感、達成感を与えることに寄与している。

またブレインストーミング（2）でスピーチ内容の項目を絞ったことで、日本語で原稿を書き英語に訳すという初心者にはありがちなステップを省き、最初から直接英語でスピーチ原稿を書くことが彼らにも可能であることがわかった。

3.4 スピーチの基準（Criteria）

母語ででも人前でスピーチすることに慣れていない、ましてや英語スピーチは経験なしか、あっても1回程度という学生にとって、スピーチの基準を自ら考えさせることは、彼らにとっては新しい試みであり、これもまた小さなブレインストーミングである。

指導によって、**smile, posture, voice volume, eye contact, organization, pronunciation, grammar** などの言葉が（日本語であるが）学生から導き出すことができた。その中からクラス全員の多数決でひとつだけ選び、その日のスピーチの基準とした。D1、D2クラスとも偶然 **smile** が選ばれた。

3.5 原稿作成と練習

既に3.3のディスカッションの行程で、ほぼ雛形と英文はできていたのだが、念のため原稿を紙に書かせることにした。それによって英語の表記に関しても指導しなければいけない点がいくつか見られた。

例えば、

- ・語と語の間にスペースがない（**Ilikemanga. I like manga.**のこと）
- ・単語のはじめをすべて大文字にする（**My Favorite Color is Pink.**）
- ・行の最後に長めの綴りの単語が配置されたとき、無秩序にその単語を次の行に分けて書く（**syllable**は無視）
- ・文章の最後にピリオドがない（これは昨今のSNSでの書き方の影響かもしれない）

などだ。また

- ・**My hometown is Kyoto, but I live in Kyoto now.** 接続詞の使い方がおかしい

という文章も見受けられた。これは筆者がブレインストーミング（2）で例文を挙げたときに**"I'm from Osaka, but I live in Takarazuka now."**と言ったことが影響したかもしれない。

文法的な誤りについては指摘しなかった。初日の英語指導ではただ1点、「主語＋動詞＋その他」の語順だけは守らせ、そのほかについては **accuracy**（正確性）よりも **fluency**（流暢性）を重視し、多少の間違いは指摘しないことにしている。なぜならこの段階では、学生に「英語の文章ができた」「自分の英語が通じた」という自覚と自信を持たすことが大切だと考えており、また1.はじめにの項で述べたように初日の授業では、学生たちに「楽しかった」「英語が面白そうだ」と印象づけることを第一目的にしているからである。

3.6 スピーチ発表

いよいよスピーチの発表であるが、まずはひとりで練習をし、その後ペアで練習をしあった。ペアでの練習時は自分たちで決めた **criteria** の **smile** が守られているかをチェックしあうことを指導した。ペアでの練習後は本番としてグループ内で発表をさせた。スピーチ後は各グループとも拍手が発生していた。

最後に各グループからひとりずつ **criteria** の **smile** が一番よかった人を選抜させ、4グループから代表者が教室の前（レクターンの後ろ）に立って自己紹介スピーチをした。その際は講師が英語で司会進行役を務め、例えば “Join me in welcoming him/her with a round of applause.” などの言葉を適時はさみながら、ショーのように盛り上がるように試みた。将来的にはスピーチ発表時の司会進行役も学生が英語で行えるようになればよいと考えている。

人前でのスピーチの経験がない学生も、最初は2人、次に4人～5人のグループ、最後に全体（18人）と徐々に聴衆の人数が増えて行くことで、緊張も緩和され、比較的負担が少なくて来たようであった。

授業の残り時間を考慮しなければならぬため、全員がクラス発表はできなかったのだが、その後、自分も全員の前で発表したいと申し出た学生が一人いた。ブレインストーミングの参加者に対する最も価値のある影響は積極性がでてくることであり（上野一郎訳 1982, p.133）、今後、場面状況に応じてブレインストーミングの手法を取り入れることができれば、学生の積極性を養う面で良い効果をもたらすことと期待できる。

3.7 シラバスの説明と感想

授業の最後にシラバスの説明をし、この日の授業の感想を書かせて初日の授業を終えた。

学生は最初は緊張していたり、頑なであったのだが、ブレインストーミングを2回行うことでアイスブレイクでき、自分たちで英語スピーチを考えたという自己満足が見られた。また同時に白板いっぱい英単語や文章が埋め尽くされているという視覚的効果も手伝って、英語が意外とできた、またはひょっとしたらできるのではないかと、という印象で終わったようである。実際、学生の感想にはネガティブな感想は少なく、ほとんどが好意的であった。以下に学生が書いた感想のうちいくつか抜粋して列記する。

- ・初の90分授業なのに早く時間が過ぎた
- ・英語が楽しそう
- ・明るくクラスでこれから楽しみ
- ・他人と話すことで新しい発見があった
- ・たくさんの人とコミュニケーションがとれてよかった
- ・いろんな人と英会話ができてよかった
- ・単位を落とすかもという不安がなくなった
- ・ice break で段々と緊張がとけていくのがわかった
- ・苦手だけど頑張れそうだと自信がでた
- ・海外の動物を見に行くことを目標に頑張る

などである。

一方、少数だがネガティブな意見もあったこともここに述べておく。

- ・英語ができる人は感じ悪い
 - ・最近 google 翻訳やスマホが利用できるから、外国語を学ぶ必要がなくなってきた
 - ・日本語だけでも情報過多なのに、その上英語の情報は増えすぎる
- という内容であった。

オズボーンは、良いブレインストーミング会議は出されたアイディアの数と会議員の感想によって証明される。お互いが「ああ面白かった！」と言い合えば、その会議は成功だと言えよう。と述べている（豊田訳 p.296）。その観点からも、筆者が行ったブレインストーミングによるアイスブレイクは成功であったと言える。

4. まとめ

英語が苦手な学生にとって入学後初日の英語の授業は緊張を緩和することが大切である。そのためにブレインストーミングしながらアイスブレイクをし、自己紹介スピーチを英語でできるまでを 90 分間で指導した。初日の授業の結果、

- ・英語でコミュニケーションを取ることが楽しい、自分にもできるかもと自身を持たすことに成功した
- ・ブレインストーミング（1）を通して英語を学ぶ意義を見つけ、それを目標にして頑張るという決意にもつながり動機付けができた
- ・ブレインストーミング（2）でスピーチ内容の項目を絞ることにより、日本語原稿を一切書かず、英語でスピーチ原稿を書くことが可能であることが観察できた
- ・初めての英語スピーチでは雛形の作成から構成を自分たちで考え、英語で作ることで満足感と達成感を得ることができ今後の授業への期待感につながった
- ・ブレインストーミング活動を通して話し合いによる自主性とリーダーシップ力の養成にも役立つことがわかった

5. 考察

データをとっていないので主観の域から出ないのであるが、最初にする独りブレインストーミングでアイディアが溢れるように出てくる学生は、その後授業が進み、テーマを与えたスピーチ原稿を書かせても与えられたテーマを深く掘り下げ、表現豊かに書く傾向にある。一方、独りブレインストーミングでアイディアが思うように出せない学生は、たとえ自分の身の回りのことをテーマにしたスピーチ原稿でも書くことに困難を示すことが観察された。

このことは英語力というよりも、母語でも自分の思いを発信し、それを言語化する能力が身につけていないことが一つの原因ではなからうか。

また何も指導しなくてもマインドマップの手法を使って独りブレインストーミングを行っていた学生がいた。おそらく過去の学校生活での指導を通じて論理的な考え方が身につけているのではと予想される。

今後の課題としては、

- ・初日のモチベーションが1年間続かない
- ・ゴールデンウィークや夏休み明けなどの長期休暇後に不登校の学生が増える
- ・芸術系学部は製作課題が多く学部の専門授業を優先し、それ以外の科目は欠席しがちになる

などがあげられる。

今後とも、初日に観察された英語を学ぶモチベーションと得られた自信をいかに長期にわたって持続させるか、毎回の授業を初日と同様、自然に楽しく参加できるような工夫をしていきたいと思う。

注釈

(注1) **Brainstorming** は翻訳者によりブレインストーミング、ブレインストロミングと両方あるが、ここではすべてブレインストーミングに統一した。

(注2) 両クラスとも学生数は18人で、ひとりずつ留年生(2年生)が混じっていた。2006年5月データ公開された国際ビジネスコミュニケーション協会が2006年5月に公開したデータによると TOEIC Bridge の90点は TOEIC 230点に換算できるとある。

(注3) 豊田晃訳「創造力を生かせ」(Your Creative Power (1948))では最初のブレインストーム会議を1939年としている(p.289)が、上野一郎訳「独創力を伸ばせ」(Applied Imagination (1963))では1938年となっている(p.104)。

(注4) 同シリーズは Toastmasters International へ会費を納めている会員のみが購入できるシリーズのため、著作権上、ここでは項目のみ紹介する。

参考文献

Osborn, A. F. (1948). *Your Creative Power*. Charles Scriber's Sons, New York

豊田晃訳 (1969) 『創造力を生かせ』 創元社

Osborn, A. F. (1963). *Applied Imagination*. Charles Scriber's Sons, New York

上野一郎訳 (1982). 『独創力を伸ばせ』 ダイヤモンド社

Toastmasters International. (2011). *Facilitating Discussion*. Advanced Communication Series.